

ひたり。白い布を水に浸すたびに冷たさが指先から腕を伝って胸の奥まで染みてくる。

清めの儀。贄に選ばれた者が山に入る前に、三日三晩身を水で拭い続ける古い慣わし。私の村では毎年春の終わりにひとりの娘を竜の領主に差し出す。豊穰と安寧の対価として。ただ、今年は少し事情が違った。くじを引く前に私が手を挙げたのだ。

「リーネ、本気で言ってるのか」

村長の家の広間で幼馴染のセドルが真っ先に声を荒らげた。日に焼けた顔を歪めて信じられないという目で私を見ている。

「本気だよ」

「なんで。なんでお前が」

「薬師の仕事はマールバあちゃんに引き継げる。私には家族もいない。適任でしょう」

理屈としては正しい。村の誰もが反論できない程度には。でも本当の理由はそんなものじゃない。セドルが私の肩を掴んだ。力が強くて少し痛い。

「贅に出された奴が帰ってきたことなんて一度もないんだぞ。食われるんだ、あの化け物に」

「食べられてるかどうかは、誰も見てないでしょ」

「リーネ！」

「ごめんね、セドル。もう決めたの」

肩に置かれた手をそっと外す。セドルの指が名残惜しそうに空を掴んだのが見えた。ごめんね。本当に。でも、私の心はとつくに決まっていた。十五年前のあの日から、ずっ

と。

山で迷った七つの冬。吹雪の中で動けなくなってもう目を閉じようとしたとき、大きな影が降りてきた。熱い腕に抱き上げられて、硬い鱗の感触が頬に当たって。金色の瞳が泣いている私を見下ろしていた。

怖くなかった。あの腕の中は吹雪の夜なのにあたたかくて、私は関係ないことを考えていた。きれいな目だな、つて。気がついたら村の入り口に寝かされ、あの影はもういなかった。熱だけが頬に残っていた。

それからずっと探していた。山を見上げるたびにあの金の瞳を思い出す。薬草を摘みに山裾まで登るのも、本当は少しでもあの領域に近づきたかったから。

誰にも言えない。こんなこと。村の誰もが恐れる竜の領

主に会いたいだなんて。清めの最後の朝、マールはあちやんが小さな包みを持ってきてくれた。

「乾燥カモミールと、傷薬の軟膏。あとこれ、ヤロウの種」
「ばあちゃん、種なんて持っていつても」

「土があれば育つよ。あんたはどこにいたって薬師だ。それを忘れるんじゃないよ」

皺だらけの手が私の手を包んだ。震えている。泣いてはいなかったけれど唇を噛んでいるのが分かった。

「ありがとう。大丈夫だよ」

嘘じゃない。怖くないのは本当だった。白い贅衣に袖を通す。薄い麻の布一枚で、春の終わりとはいえ山の上は冷えるだろう。でも慣わしだから仕方ない。腰に薬草の包みだけ結びつけて村の門をくぐった。

振り返るとセドルが拳を握って立っていた。何か言いたそうに口を開いて、結局何も言わなかった。

ごめんね。

私は山道に足を踏み出した。朝露に濡れた草が素足に冷たい。見上げた空は透き通るような青。あの山の向こうにあなたがいる。胸の奥で、今まで溜まったなにかが静かに脈打っている。期待と呼ぶには重すぎて祈りと呼ぶには熱すぎる、名前のつけられない感情。

一歩ずつ山を登る。会いに行くよ。

山道は思っていたよりずっと険しかった。獣道すら途切

れる急斜面を木の根を掴みながら登る。贅衣の裾はとつくと泥だらけで、素足の裏は小石で切れて薄く血が滲んでいた。

半日ほど登ったところで空気が変わった。肌がぴりつ、とする。見えない膜を一枚くぐったような感覚。結界だ、と直感で分かった。途端に周囲の木々の色が濃くなり、鳥の声が遠のき、代わりに風の低い唸りだけが耳に残る。

竜の領域。さらに登ると、山肌をくり抜いたような巨大な岩屋が現れた。天然の洞窟を削り広げたもので、入り口には古い紋様が刻まれた石柱が二本、門のように立っている。その間に人影があった。

長身の男。長い髪が風に揺れている。その男は腕を組んで石柱に背を預け、金色の瞳がまっすぐ私を見ていた。

息が止まった。あの目だ。十五年前、吹雪の中で私を見下ろしていたあの金色。

「……っ」

声が出ない。膝が震えているのは疲労のせいだけじゃない。胸の奥で何かが弾けて熱い波が全身に広がっていく。会いたかった。ずっと、ずっと会いたかった。でも彼の第一声は、私の期待を真正面から裏切った。

「帰れ」

低い声。感情の読めない平坦な響き。

「贅は要らない。村にそう伝えろ」

「……え？」

「聞こえなかったか。帰れと言った」

冷たい。氷みたいに冷たい声。でも私は気づいていた。

彼の視線が一瞬だけ私の足元に落ちたこと。血の滲んだ素足を見てわずかに眉が動いたこと。

「帰りません」

「何？」

「帰りません。私は贅として来ました。受け取る義務があるはずです」

「義務などない。あれは人間が勝手に始めた慣習だ」

「じゃあ、なぜ毎年受け入れてきたんですか」

彼が黙った。ほんの一拍。その沈黙に私は賭けた。

「私の名前はリーネです。ファルム村の薬師の」

言い終わる前だった。彼の瞳孔が縦に裂けた。丸かった黒い瞳が一瞬で細く鋭くなり、金色の虹彩が燃えるように広がる。人の目じゃない。竜の目。呼吸が荒くなったのが

分かった。彼の、じゃない。私の。だってその目が。あの夜と同じ目が私を見ている。

「……知っている」

声が掠れていた。さっきまでの冷たさが嘘みたいにぎりぎり^ぎりと絞り出すような声。

「お前が誰か、知っている」

やっぱり。覚えていてくれた。目の奥が熱くなる。泣きそうだった。でも泣いたらきつとこの人はもっと遠くに行ってしまう。だから唇を噛んでまっすぐ見つめ返した。

「なら、帰れなんて言わないで」

長い沈黙。

「……好きにしろ」

それだけ言って彼は背を向けた。岩屋の奥へ歩いていく

背中は広くて、その肩甲骨のあたりに鱗が散っているのが見えた。

名前も教えてくれないんだ。でも、追い返されなかった。それだけで胸がいっぱいだった。

岩屋の中は思ったより広く、いくつもの部屋に分かれていた。彼が足を止めたのは奥まった小さな一室。石壁に苔が薄く生えていて、天井の隙間から細く光が差し込んでいる。簡素な寝台と木の卓がひとつ。

「ここを使え」

「ありがとうございます」

「礼を言うな。お前が勝手に残るだけだ」

そう言って出ていく背中に、私は思い切って声をかけた。
「あの、お名前」

足が止まる。振り返りはしない。

「……ヴァルド」

それだけ。低く短い響きが石壁に反響して消えた。

ヴァルド。

口の中で転がしてみる。舌に乗せた瞬間、胸の奥がきゅつと締まった。今までの間、名前も知らなかった。顔も覚えていなかった。あの腕の熱さと金色の瞳だけを抱えて生きてきた。それが今、名前になった。

部屋に一人残されて寝台に腰を下ろす。硬い。でも、贅衣一枚の体には岩の冷たさがかえって心地よかった。薬草の包みを解いてヤロウの種を掌に転がす。おばあちゃんの声が蘇る。『土があれば育つよ』。

窓代わりの天井の隙間から夕焼けの色が差し込んでいた。

ここで暮らすんだ、私。あの人のすぐ近くで。

足音が遠ざかったのを確認してから壁に拳を叩きつけた。ばきり。石が碎ける。拳の皮が裂けてすぐに塞がる。竜人の再生力が今は恨めしい。痛みで頭を冷やしたかった。

リーネ。あの子供が来た。分かっていた。贅に名乗り出たと風の精霊が告げた時点で分かっていた。止めるべきだった。結界の外で追い返すべきだった。なのに待っていた。石柱の前で、半日も。

名を告げられた瞬間体の制御が利かなくなった。瞳孔が変じるのを抑えられなかった。こんなことは初めてだ。十

五年前、吹雪の山で拾った小さな体。凍えて青くなった唇。それでも私を見上げて、泣きながら『きれい』と言った、あの子供。

村の入り口に置いて去った。それで終わりのはずだった。終わらなかった。

気がつけば、風に乗せて気配を探っていた。山裾まで薬草を摘みに来る姿を岩陰から見ていた。背が伸びた。髪が長くなった。笑い方が変わった。十二の年に熱を出して寝込んだ三日間は、結界の際で夜通し気配を追った。

異常だと分かっている。竜人が人間ひとりに執着するなど同胞が知れば嗤うだろう。番でもない。契りも交わしていない。ただの人間の小娘に、三百年を超えた竜が振り回されている。

それでも。

あの血の滲んだ足を見た瞬間、喉の奥から唸りが込み上げた。抱え上げて、傷を塞いで、二度と痛い思いをさせたくないと思うった。

帰れ、と言った口が自分でも憎い。帰ってほしくなかった。

あの部屋の寝台に横たわっている気配が壁越しに伝わってくる。呼吸の音。寝返りを打つ衣擦れ。心臓の鼓動まで聞こえる。竜の聴覚が今ほど厄介だと思ったことはない。拳の傷はもう塞がっていた。壁に額を押し当てて目を閉じる。近い。近すぎる。この距離で正気を保てるのか。自分でも分からなかった。

岩屋での生活が始まって三日。ヴァルドは私を避けている。それだけは確かだった。

朝起きると卓の上に食事が置いてある。焼いた山鳥の肉、木の実、清水の入った器。まだほんのり温かいから少し前まで彼がここにいたのだと分かる。でも姿はない。

「いただきます」

誰もいない部屋で手を合わせる声が石壁に跳ね返って寂しく響いた。

食事の後、岩屋の中を探索してみた。広い。思っていたよりずっと広い。いくつもの部屋が通路で繋がっていて奥に行くほど天井が高くなる。壁には所々に灯りが埋め込ま

れており、淡い燐光を放っている。竜人の技術なのか、魔法なのか。

ヴァルドの部屋らしき場所は見つけたけれど入る勇氣はなかった。扉の前に立っただけで心臓がうるさくなつて、結局逃げるように自分の部屋に戻った。

何をしているんだろう、私。贅として来たのに主人の顔も見られない。

四日目、意を決して行動に出た。岩屋の入り口近くに日当たりのいい場所を見つけ、持ってきた種を蒔いた。苔の生えた岩の隙間に溜まった土を集め、小さな畑のようなものを作る。ついでに周囲を見回すと、見覚えのある薬草がいくつも自生していた。

「カモミールに、セントジョーンズワート。あ、これフイー

バーフューだ。こんな高地に」

思わず声が弾む。薬師の血が騒ぐ。摘んでいいのか分らないけれどとりあえず場所だけ覚えておこう。

部屋に戻って卓の上を拭き、寝台の敷布を干し、床の砂埃を掃いた。自分の部屋だけじゃ物足りなくて通路や広間も少しずつ掃除した。

「……何をしている」

五日目の夕方、ようやく声をかけられた。振り返ると、通路の奥にヴァルドが立っていた。腕を組んで眉間に皺を寄せている。

「掃除です」

「見れば分かる。なぜだと聞いている」

「住んでるからですよ。自分の住む場所はきれいにしたい

じゃないですか」

「……住む」

その一語を、彼は奇妙な響きで繰り返した。まるで初めて聞く言葉みたいに。

「あと、入り口の近くに薬草の畑を作りました。勝手にすみません」

「好きにしろと言った」

「じゃあ、好きにします。あ、それと」

一歩近づくと、彼が一歩退いた。……退いた。あの大きな体が、私一人分の距離を取るために後ずさった。

「夕食、一緒に食べませんか。せっかく山鳥があるなら、薬草で香りをつけて焼いた方がおいしいと思うんです」

「必要ない」

「おいしいですよ」

「竜人に味の好みはない」

「嘘。朝の木の实、甘いやつだけ選んでありましたよね。酸っぱいのは除けてあつた」

彼が一瞬、目を逸らした。ほんの一瞬。でも私は見逃さなかつた。

「……たまたまだ」

「じゃあ、たまたま一緒に食べてください」

沈黙。長い沈黙。鋭い瞳が私を見て、逸れて、また戻ってくる。

「……一度だけだ」

その夜、初めて同じ卓で食事をした。私が焼いた山鳥にローズマリーを散らしたものをヴァルドは無言で食べた。

感想はなかった。でも、全部食べた。

「おいしかった？」

「普通だ」

「普通かあ。じゃあ明日はもうちょつと頑張ります」

「明日もやるのか」

「毎日やりますよ。ご飯は一緒に食べた方がおいしいもの」
彼はそれ以上何も言わなかった。食器を片付ける私の背中を、じつと見ていた気配だけが残った。

それから夕食だけは一緒に食べるようになった。

会話は少ない。私が一方的に話してヴァルドが短く答えるだけ。今日見つけた薬草のこと、畑の種が芽を出しそうなこと、岩屋の奥で見つけた不思議な紋様のこと。

「あの紋様、何の意味があるんですか」

「古い祝詞だ」

「読めるんですか」

「当然だ」

「いつか教えてほしいな」

「……なぜ」

「あなたのことを知りたいから」

また沈黙。彼はいつもそうだ。私の言葉を受け取ると長い間黙って、それから短い言葉を返す。まるで、どう答えれば私を遠ざけられるか考えているみたい。

でもね、ヴァルド。あなたの耳、赤くなってるの気づいてる？ 鱗のない部分、耳の先端だけが薄く色づいているのを私はちゃんと見ている。

眠ったのを確認してから足音を殺して部屋の前に立つ。もう何度目か分らない。毎晩こうしている。扉の隙間から漏れる寝息を聞いて無事を確かめ、それで戻る。それだけのことにどれほどの意志力が要るか、この娘は知らない。今夜は少し寝返りが多い。寒いのかもしれない。山の夜は冷える。毛布をもう一枚持つてくるべきか。いや、部屋に入れば気配で起きる。起きれば目が合う。目が合えば。

駄目だ。

指先が扉に触れている。爪の先が鱗質に変じかけている。引っ込めろ。

「……ん、ヴァルド」

心臓が止まった。寝言だ。寝言だと分かっている。それでも、自分の名前がこの娘の唇から零れた瞬間全身の鱗が総毛立った。

あの娘にこの名を呼ばれることを望んでいた。あの吹雪の夜、腕の中で泣いていた小さな体。あのとき名乗っていたら、あのもっと早くこの声で呼ばれていたのか。馬鹿な考えだ。あのときこの子供は七つだった。名乗ってどうする。

でも今は二十二だ。女の体をしている。薬草の匂いがする髪。食事のときに笑う口元。掃除をしながら鼻歌を歌う声。ローズマリーを散らす細い指。

全部知っている。全部見てきた。山の上から風に乗せて十五年分。それを愛と呼ぶのか、執着と呼ぶのか。分からない。分かりたくない。名前をつけてしまったらもう手放

せなくなる。

「……うん……」

寢息が穏やかになった。深い眠りに落ちたらしい。扉から手を離す。指の跡が石に残っていた。力を入れすぎたか。踵を返す。自分の部屋に戻る足取りが重い。今まで孤独に慣れていたはずだった。一人で十分だった。たった数日、この娘がいるだけで岩屋の空気が変わった。花の匂いがする。食事の湯気が立つ。誰かの足音が石の床を叩く。それが消えることを想像しただけで腹の底が冷える。

帰すべきだ。帰せない。自室の寝台に横たわっても眠れるはずがなかった。瞼の裏に焼きついてるのは、夕食のとき、向かいに座った彼女の顔。

「あなたのことを知りたいから」

あの目で言うな。まっすぐな目でそんなことを言うな。
俺がどれだけ堪えているかお前は知らない。知らないまま、
いてくれ。

頼むから。

岩屋の暮らしに慣れ始めた、八日目の昼下がりだった。
入り口付近の薬草だけでは足りなくなつて、少し離れた
崖沿いの斜面まで足を伸ばした。そこに群生しているセン
トジョーンズワートの黄色い花がちょうど摘み頃だったか
ら。

岩肌に張りついた苔を踏んだ瞬間、足が滑った。

「あっ」

体が傾く。手を伸ばしたけれど掴めるものは何もなく、視界がぐるりと回転した。崖の下が見える。岩だらけの谷底。落ちたら、死ぬ。

そう思った刹那、背中に衝撃が。落下の衝撃じゃない。抱きとめられた感触。

片腕が腰に回り、もう片方が背中を支えている。風圧。ばさりと重い音を立てて何かが広がった。見上げると、黒い翼が空を覆っていた。蝙蝠に似た膜の翼。その付け根はヴァルドの背中に繋がっている。金色の瞳が間近にあった。

「……馬鹿が」

低い声。怒っている。でもその腕が震えていた。

あの日と同じだ。吹雪の夜。抱き上げられて、大きな腕に包まれて。あのときと同じ構図。同じ熱。違うのは、私がおもう子供じゃないこと。

「ごめんなさい、足が」

「黙れ。動くな」

翼が一度大きくはためいて、私たちの体が浮き上がった。数秒の浮遊感のあと岩屋の入り口に降り立つ。ヴァルドは私を下ろさなかった。そのまま中に入り、私の部屋の寝台に降りしてようやく腕を解いた。翼が折り畳まれ、背中に溶けるように消えていく。

「足を出せ」

「え」

「怪我をしている。足を出せ」

言われて初めて気づいた。右の足首が擦り剥けて血が筋になつて流れている。崖の岩角で切つたらしい。ヴァルドが片膝をついて私の足を持ち上げた。大きな手が足首を包む。

「っ……」

痛みじゃなかった。彼の手が熱かった。竜人の体温は人間より高いと聞いてはいたけれど、直に触れるとこんなに違うのかと驚く。傷口を洗うために持ってきた清水が冷たくてその温度差に皮膚が粟立った。

「しみ、ます」

「我慢しろ」

ぶっきらぼうに言いながらも指先はひどく丁寧だった。傷口の周りの泥を洗い流し、清水で何度も濯いで、柔らか

い布で押さえる。その指先の爪が薄く黒い鱗質なのが見えた。硬くて、滑らかで、人間の爪とは全然違う。

「……薬はあるか」

「腰の包みに軟膏が」

彼が軟膏の蓋を開け、指先に少量取る。足首の傷に塗る手つきが慎重すぎてくすぐったかった。

そのとき、彼の手が震えているのに気づいた。指先が、微かに。

「ヴァルド」

「黙っている」

「手、震えてる」

彼の指が止まった。軟膏を塗る動作のまま固まった。金色の瞳が伏せられていて表情が読めない。

「怖くないよ」

私の口から自然に出た言葉だった。あの時にも言いたかった言葉。以前は泣くことしかできなかったけれど、今なら言える。

彼の手に自分の手を重ねた。震えが直に伝わってくる。

「怖くないよ、ヴァルド。あなたのこと」

「……怖いのは俺の方だ」

顔を上げた彼の瞳が揺れていた。虹彩が波打つように明滅し、瞳孔が丸くなったり縦に細くなったりを繰り返している。制御できていないのだと分かった。

「お前に触れることが怖い。触れたら止まれない自分が怖い」

声が掠れている。絞り出すような、喉の奥から無理やり

引きずり出したような声。

「十五年。十五年、ずっとお前を」

言葉が途切れた。言いかけて飲み込んだ。でも、十分だった。

十五年。同じ時間を彼も数えていた。

「止まらなくていい」

私の声も震えていた。

「止まらなくて、いいよ」

彼の手が私の足首から離れて頬に触れた。掌が大きくて、顔の半分が覆われる。熱い。体温がじかに伝わってきて、頬が火照っているのか彼の手が熱いのか分からなくなる。

親指が唇に触れた。なぞるように下唇の輪郭を辿る。爪先の鱗質が唇の薄い皮膚に引っかかって、その微かな刺激

だけで体の芯がぞくり、と震えた。

「リーネ」

名前を呼ばれた。初めて、彼の声で。低くて、熱くて、切実な響き。

「……後悔するぞ」

「しない」

返事を待たなかった。彼の方から唇が降りてきた。最初は触れるだけ。硬い唇が私の唇にそっと押し当てられて体温だけが交わされる。ふるえながら、確かめるように角度を変えてもう一度。

三度目で堰が切れた。舌が入ってきた。ヴァルドの舌は人間より長い。それが私の舌に絡みついて口腔の粘膜を丁寧に舐め上げていく。先端がわずかに二股に分かれている

のが分かつて、その形状が上顎を擦るたびに甘い痺れが頭の奥に広がった。

「ん、う……っ」

息が足りない。でも離れたくない。彼の髪を掴んで引き寄せるとヴァルドの喉の奥から低い唸りが漏れた。獣の声。その振動が唇越しに伝わってきて背筋に電流みたいなものが走る。

唇が離れたとき、唾液の糸が引いた。

「あ……」

息を継ぐ暇もなかった。彼の唇が顎を伝って首筋に落ちた。鎖骨の窪みに舌が這う。耳の下の薄い皮膚を吸われて小さな声が漏れた。贅衣の合わせに彼の指が。

「……いいのか」

首筋に顔を埋めたまま、くぐもった声で訊かれた。

「うん」

布がはだけていく。薄い麻一枚しかない衣だから紐を解くだけで肩から滑り落ちた。春の夜気が素肌に触れて乳首が勝手に硬くなる。ヴァルドが息を呑んだのが分かった。

「……見ないで、そんなに」

「無理だ」

即答だった。彼の目が、私の胸に釘づけになっている。瞳孔はもう完全に竜のそれで、縦に裂けた黒い線が細く、きつく絞られていた。

「ここが見たかった」

その声の熱に体の奥が疼いた。彼の手が胸に触れた。両手で包み込むように。掌の熱さと指先の鱗の硬さ。異なる

二つの感触が乳房を挟んで、その違いに肌が過敏に反応する。

「あ、ヴァル……」

親指が乳首の先端を掠めた。鱗質の爪先が乳首のすぐ横を擦って、人間の指では出せないざらりとした刺激が神経を引っ搔く。

「ひっ……♡ん、んう……♡」

もう片方の胸にも同じことをされる。両方の乳首を親指と人差し指で挟んで転がされて、力加減を探るように強くなったり弱くなったりを繰り返す。硬い鱗の指先に柔らかい乳首を潰されるたびに、下腹に熱が溜まっていく。

唇が鎖骨から降りてきて、右の乳首を含まれた。

「あああ♡」

二股の舌先が乳首を挟んだ。左右から交互に弾くように舐められて声を抑えられなかった。吸い上げられて、舌先で転がされて、歯の先が軽く触れて、その刺激の波が止まらない。左の胸は指で捏ね続けられていて、両方同時に攻められる快感に頭がぼんやりしてくる。

「声を出せ。聞きたい」

耳元で囁かれた低い声に、体が反応して腰が跳ねた。

彼の唇がさらに下がっていく。胸の谷間から腹部へ、臍の横に舌を這わせて、下腹の産毛をくすぐるように息を吹きかけられる。行き先が分かって全身が強張った。

「ま、待って。そこ」

「怖い」

「怖いんじゃないくて、恥ずかしっ……♡」

「……慣れろ」

慣れろって。そんな乱暴な。

でも抗議する間もなく、太腿を両手で開かれた。鱗質の指が内腿の柔肌に食い込んで、その手の熱さと硬さに腰が勝手にびくつと跳ねる。

夜気が濡れた場所に触れた。自分がどれだけ濡れているか、そのひんやりとした空気で否応なく分からされる。ヴアルドの息が止まった。

「……これは」

「見ないでっ……」

「無理だと言った」

声が一段低くなっていた。喉の奥で唸るような竜の領分に踏み込んだ声。

指が触れた。秘所の表面を一本の指先がゆっくりとなぞっていく。花卉の合わせ目を上から下に辿り、溢れている蜜を掬い取るように。ぬるり♡と音がした。

「ひうつ♡」

「ここか」

指先が陰核の包皮に触れた瞬間、腰が浮いた。

押し戻される。腰を掴まれて寝台に縫いとめられて逃げ場がない。その状態で、親指の腹が包皮を剥くように押し上げて、露出した陰核の頂点をくるり♡と円を描くように撫でられた。

「んあああ♡ま、だめ♡そこ……っ♡」

「ここが感じるのか」

「あ♡♡あ♡♡やあ♡……♡」

鱗質の爪先と人間に近い指の腹、その境目の微妙な段差が陰核を擦るたびに視界に白い火花が散る。人間の指では絶対にできない刺激。硬さと滑らかさの間で敏感な突起が翻弄されて、下腹の奥に熱い塊が急速に膨らんでいく。

「っ、あ♡ヴァル、ヴァルドお……♡」

「……もっと呼べ」

指の動きが速くなった。陰核を挟んで上下に擦る動作に変わって、びちゅ♡びちゅ♡と蜜を弾く水音が部屋に響く。恥ずかしい。恥ずかしいのに、体は正直で、腰が勝手に指を追いかけてしまう。

「やっ♡もう、なにか来……っ♡♡♡」

「いい。来い」

一際強く陰核を押し潰された。

「あああああっ♡♡♡」

頭の中が真っ白に、ぱん、と弾けた。下腹から全身に向かつて熱い波が放射状に広がって指先まで痺れる。声が出ているのかどうかも分からない。腰が何度も跳ねて、太腿がぶるぶる震えて、指一本で達したことが信じられなかった。

息が戻らないまま、ヴァルドの顔が下がっていくのが見えた。

「え、待、ちょっと今ので……」

温かくて、湿った感触が直接触れた。

舌だ。ヴァルドの舌が、震えが収まっていけない陰核を直に舐めている。

「いやああっ♡♡いま敏感、むりっ……！」

二股に分かれた舌先が陰核を両側から挟み込んだ。左右から同時に舐め上げられる。人間の舌では絶対にできない動き。分かれた先端が交互に震えるように動いていったばかりの過敏な突起を容赦なく撚る。

「ひいっ、あっあっあっ♡んっ♡♡」

逃げようとした腰を両手で掴まれて引き寄せられた。指が臀部に食い込んで、彼の口元に秘所を押しつけられる格好になる。二股の舌が陰核を包み込んだまま、ちゅう♡♡♡と吸い上げられた。

「だめえっ♡♡また、また来ちゃ……っ♡」

二度目の波がすぐにやってきた。一度目より鋭くて、腰の芯を貫くような快感が突き上げて絶頂の声が鳴咽みたい喉から漏れた。

でも舌は止まらなかった。

ヴァルドの二股の舌は器用で残酷だった。片方の舌先で陰核を弾きながら、もう片方が陰核の付け根を撫でる。吸って、舐めて、弾いて、包んで。パターンが毎回微妙に変わるから体が慣れる暇がなくて、快感の波に吞まれ続ける。

「やつ、ああ、もう……む、り……♡♡」

涙が勝手に溢れていた。気持ちよくて泣いてるなんて初めてで、自分の体が自分のものじゃないみたいだった。

ずるり♡と何かが入ってきた。

指だ。一本。長い指が膣口からゆっくり内壁を押し広げながら侵入してくる。爪先の鱗が入り口の粘膜を擦って、ぞくりとした快感が腰を突き抜けた。

「あう……っ、指……♡」

「痛いかな」

「痛く、ない……熱い」

本当に熱かった。彼の指は人間の体温より明らかに高く、膣の中がじわりと温められていく感覚がする。その指がゆっくりと曲げられて前壁をなぞるように押した。

「ひいんっ♡」

「ここか」

「そこ、なにか……変な、感じ……♡」

ぐりぐりと前壁の膨らみを指の腹で押されながら、同時に舌が陰核を吸い続けている。中と外から同時に攻められて三度目の波が下腹の奥からせり上がってくるのを感じた。ぐぷ♡♡指が二本になった。きつい、と思ったのは一瞬で、溢れる蜜が潤滑になってずるりと呑み込んでしまう。

二本の指が交互に前壁を押して、くちゅ♡くちゅ♡♡と粘膜を掻き回す音が耳に届く。

「あっ、あっ、あっ、ああ♡♡ヴァルドっ、もうだめ、もうっ……♡♡♡」

「……いい。全部出せ」

低い声が秘所に振動になって伝わった瞬間、三度目が来た。

「あああああ♡♡♡」

背中が寝台から浮き上がり、膣が彼の指を締め上げた。びくびくと痙攣する体をヴァルドは片腕で抱きとめながら、指も舌も止めなかった。

「ま、まだ♡♡いま出て……やああ♡♡♡」

四度目。三度目の余韻が消えないうちに重なった絶頂は

意識が飛びかけるほど鋭かった。声にならない声を上げて、彼の髪を掴んで、腰を押つけて、自分が何をしているか分からないまま快樂の波に溺れた。

どれくらいそうしていたのか分からない。気がついたとき、ヴァルドの指はもう抜かれていて頬に温かい掌が当てられていた。親指が涙の跡を拭っている。

「……泣くな」

「だっ……て」

声がまだ震えている。体の芯がずきずきと余韻を引いていて指先まで力が入らない。

「ひどい、よ。こんなの……知らなかった」

「何がだ」

「こんなに気持ちいいの、知らなかったの。ヴァルドのせ

い……」

彼の手が一瞬止まった。金色の瞳が揺れている。さつきまでの獣じみた鋭さが溶けて、その奥にあるのは怯えにも似た切実さだった。

「……もう返せない」

唇が額に触れた。

「もう、返せない。リーネ」

その声を聞いた瞬間涙が止まらなくなった。嬉しいのか切ないのか自分でも分からない。ただ、この人が今まで押し込めていたものが、溢れ出しているのだと分かった。

「返さなくていいよ」

彼の首に腕を回して引き寄せた。鱗の感触が腕の内側に当たる。硬くて、滑らかで、奥から体温が滲み出ている。

「私はここにいたくて来たの。あなたの傍に」
ヴァルドが私を抱きしめ返した。力が強くて少し苦しい。
でも離れたくなかった。この腕の中で、十五年分の距離が
ようやく溶けていく気がした。

薄い光が天井の隙間から差し込んで、瞼の裏がぼんやり
明るい。

目を開けると、見慣れた石の天井。寝台の上。いつもの
部屋。でもいつもと違うのは、体中がだるくて太腿の内側
がうっすら筋肉痛みたいに痛いこと。

昨夜のことが一気に蘇って顔が燃えた。声。あんな声出

した。何回も。彼の前で。

毛布を頭から被って丸くなる。死にたい。死にたいは嘘だけど、穴があつたら入りたいのは本当。ここ岩屋だから穴だらけだけど、そういうことじゃなくて。

……ヴァルドは。

毛布の隙間から部屋を窺う。誰もいない。でも卓の上にはいつものように食事が並んでいた。焼いた山鳥、木の実、清水。それと、見慣れない小さな花が一輪。白い野花が水を張った石の器に差してあつた。

なにこれ。

起き上がって花に触れる。サクラソウだ。この時期、結界の中に咲くのか。誰が摘んだかなんて考えるまでもなくて、また顔が熱くなった。

食事を終えて部屋を出ると、通路の奥からヴァルドの気配がした。広間にいるらしい。深呼吸を三回して足を向ける。

彼は窓辺に立っていた。私の足音に気づいて振り返った顔はいつも通りの無表情。でも、目が合った瞬間、ほんの一瞬だけ視線が泳いだのを私は見た。

「おはよう、ヴァルド」

「……ああ」

「ご飯、ありがとう。お花も」

「花は知らない」

嘘つきめ。この岩屋に私とあなた以外、誰がいるの。でも追及はしなかった。彼なりの精一杯なのだとなんとなく分かったから。

「あの、昨日の」

「忘れろ」

遮るように言われた。短くて硬い声。壁を立てるみたいな響き。

「……俺が悪かった。お前は贄として来た。あんなことをするべきではなかった」

胸の真ん中を、冷たい手で掴まれたみたいだった。

するべきではなかった。あれは間違いだったって、そういうこと？

「忘れろ、って」

「忘れろ」

二度目はもっと低く、もっと固い声だった。俯きそうになった視線をぐっと堪えて彼の顔を見る。無表情。冷たい

金色の目。完璧な拒絶の壁。でも。

耳。彼の耳の先が赤い。人間と同じ薄い皮膚の耳。その先端だけがうっすらと紅潮している。

「……分かった」

今は引こう。

「忘れるね。ご飯の片付け、してくるから」

背を向けて歩き出す。泣きそうだった。でも泣かない。だって、あの耳を見た。忘れろって言いながら耳を赤くしてる人の言葉を、額面通りに受け取るほど私は素直じゃない。

十何年も待ったんだ。もう少しくらい待てる。

部屋に戻って、卓の上の白い花をもう一度見つめた。花は知らない、って言った口でこういうことをする人。

「……不器用すぎるんだから」

誰もいない部屋で笑ったら、少しだけ泣いた。少しだけ。

足音が遠ざかる。背を向けて歩いていくリーネの姿が広間の角を曲がって消えるまで動けなかった。

忘れろ。自分で言った言葉が臓腑を焼いている。

忘れてほしくない。あの声を、あの涙を、俺の名を呼ぶあの唇を。一つ残らず覚えていてほしい。それなのに『忘れろ』と言った。言うしかなかった。

あのまま進めばもう戻れない。人間の小娘を抱いて、貪って、手放せなくなつて。三百年の矜持も、竜人の理性も、

全部あの葉草の匂いにする髪の中に捨ててしまおう。それが分かつているから。

拳を握る。昨夜の感触がまだ手に残っている。柔らかい太腿。熱い粘膜。指を締め上げる膣壁の震え。

思い出すだけで全身の鱗が逆立つ。あの花を見て少しだけ笑った気配がした。壁越しでも分かる。竜の聴覚が拾った微かな吐息の変化。それだけで胸が軋む。

忘れろと言ったのに花を置いた。矛盾している。分かっている。分かっている。止められなかった。夜明け前に桜草を見つけたとき、気づいたらもう手が伸びていた。

この手は俺の言うことを聞かない。この娘の前では。もうとつくに壊れているのかもしれない。

あの夜から四日経った。

ヴァルドとの距離は元に戻った。いや、少し近くなったのかもしれない。相変わらず会話は少ないけれど夕食は一緒に食べるし、時々私が薬草を摘んでいると離れた場所から見ている気配を感じる。目が合うとすぐに逸らされるけれど。

そんな、ぎこちない穏やかさが続いていた朝。結界の外から人の気配が近づいてきた。

「リーネ！」

その声を聞いた瞬間、驚きと懐かしさが同時に湧いた。岩屋の入り口に走ると、息を切らしたセドルが立っていた。

日に焼けた顔に汗が光って肩で大きく呼吸している。結界を越えてくるのは相当な負担だったはずだ。

「セドル!?　なんで」

「迎えに来た。帰るぞ、リーネ」

真っ直ぐな目。昔から変わらない猪突猛進の目。

「帰るって、私は贅で」

「んなもん知るか。お前が無事なら連れ帰る。村のじいさんたちにも話はつけてきた」

彼は私の手を取った。大きくてごつごつした農夫の手。

小さい頃から知っている幼馴染の手。

「ずっと心配してたんだ。頼むから、一緒に」

「セドル、聞いて。私は」

背後の空気が凍った。比喻じゃなく。気温が二度は下がっ

た。首筋に刺さるような殺気を感じて振り返ると通路の奥にヴァルドが立っていた。

その瞳が完全に竜のそれに変わっていた。縦に裂けた瞳孔。虹彩の金が赤みを帯びて、琥珀というより溶岩に近い色。首筋の鱗が逆立って喉の奥から地鳴りのような低い音が漏れている。

ヴァルドの視線は私を見ていなかった。セドルの手を見ていた。私の手を握っているセドルの手を。

「ヴァルド」

声をかけたけれど反応がない。セドルが私を背中に庇うように一歩前に出た。

「お前が竜の領主か。リーネを返してもらう」
「セドル、やめて」

「こいつに何かされたのか。されたなら」

「されてない。違うの、聞いて」

ヴァルドは一言も発さなかった。無言のまま、じり、と一歩前に出た。その一歩でセドルの顔から血の気が引いたのが分かった。当然だ。至近距離で竜人の威圧を受けて平気でいられる人間はいない。

「ヴァルド、やめて。この人は幼馴染で、ただ心配して」
「触るな」

低い。地の底から響くような声。セドルに向けた言葉だった。私の手を握っているその手に向けた。

「セドル、手、離して」

「リーネ」

「お願い。大丈夫だから。離して」

セドルの手がゆつくりと離れた。ヴァルドの唸りがわずかに収まる。でもまだ瞳は竜のまま。私はセドルに向き直った。

「帰らないよ、セドル」

「なんで」

「ここにいたい。自分で決めたの。お願い、分かっ
セドルの顔が歪んだ。悔しさと、悲しさと、怒りと。全部混ぜたような顔。幼馴染の前でこんな顔をさせてしまっていることが申し訳なかった。

「……あいつがいいのか」

「うん」

「人間じゃないんだぞ」

「知ってる。それでも」

長い沈黙のあと、セドルは一步退いた。

「分かった。分かったよ。でも何かあったら、いつでも帰ってこい」

「ありがとう、セドル」

彼が背を向けて山道を下っていく。その背中が木々の間に消えるまで見送って、振り返る。ヴァルドはまだそこにいた。拳を握り締めて石柱の横に立っている。

「ヴァルド」

「……帰りたいなら帰れ」

「帰りたくないって言ったでしょ、いま」

「あの男がいる。お前を心配する人間が。あちら側に」

「うん。いるよ。大事な幼馴染だよ」

ヴァルドの奥歯が噛み合う音がした。ぎり、と。

「でも私がいたいの、ここ」

一歩近づく。彼は退かなかった。

「ここにいたい。あなたの傍に」

「……なぜだ」

「分かってるくせに」

もう一歩。手を伸ばせば届く距離。彼の瞳の中に自分の顔が映っているのが見えた。ヴァルドの手が動いた。

速かった。腰を掴まれて、引き寄せられて、気づいたときには背中が石壁に押しつけられていた。両手が頭の横に縫いとめられる。彼の体が覆いかぶさるように迫って逃げ場がなくなった。顔が近い。吐息が混ざるほど近い。

「帰れと言っている」

「嘘つき」

「嘘じゃない」

「じゃあ手、離してよ」

彼の指に力が入った。離すどころか手首を握る力が強くなる。痛いほどじゃない。でも絶対に逃がさないという意志がある、そういう力。

「離せないんでしょ」

ヴァルドの呼吸が荒くなった。鼻梁に皺が寄って犬歯が覗いている。人間よりずっと鋭い、竜の牙。

「あいつが触った」

声が震えていた。怒りなのか、別の何かなのか。

「お前の手を、あいつが」

「セドルは幼馴染で」

「分かっている。分かっている、おかしくなっている」

額を私の肩口に押しつけられた。銀灰の髪が頬をくすぐる。肩に当たる呼吸が熱くて、速い。

「嫌だった」

ヴァルドがそんな言い方をしたのは初めてだった。

「あいつがお前に触るのが嫌だった。お前があいつの名を呼ぶのが嫌だった。殺すかと思った。人間一人に本気で殺意を抱いた自分に反吐が出る。こんなものは竜人の矜持じゃない。獣だ」

「ヴァルド」

「帰れ。俺の傍にいたらお前を壊す」

「……壊していいよ」

彼が顔を上げた。瞳が見開かれている。

「壊していい。全部あなたのものだよ、ヴァルド。手も、

名前を呼ぶ声も。セドルのものじゃない。あなたのもの」
あ、と思ったときにはもう唇を塞がれていた。忘れろと言った夜の口づけとは違う。前回の優しさの欠片もない、噛みつくような口づけ。下唇を牙の先で引っかかれて鉄の味が舌に広がった。

「んっ……」

血の味に二股の舌が絡んできて口腔を蹂躪される。呼吸ができない。でも体は怖がっていないくて、むしろ下腹がきゅうつ♡と締まるような疼きが走っていた。

ぷは。唇が離れた。

「本気だからな」

声が獣だった。喉の奥で共鳴する、複数の音が重なったような竜の声。

「止まらないぞ。もう止まらない」

「止まらなくていい」

この前と同じ言葉。でも今度は彼も迷わなかった。壁に押しつけられたまま贅衣の紐を引かれた。布が肩から落ちて、腰に引っかかったのも乱暴に剥ぎ取られる。下着もない贅衣一枚だった体が、一瞬で晒された。

「あっ、ここ外……」

「誰も来ない」

石壁が背中に冷たい。その冷たさと、ヴァルドの体温の落差がくらくらするほど鮮烈で、肌が一面に粟立った。

彼の手が首筋から鎖骨を辿り胸を掴んだ。鱗質の指先が乳首の先端を引っ搔くように擦って、反射的に背が仰け反った。

「ひあっ♡」

「あの男がこうしたか」

「してないっ、誰にもされてな……んんっ♡」

乳首を抓み上げられて言葉が途切れた。痛みの手前の強さで引っ張られて、放される。じんじんする先端をすぐに舌先で舐め上げられて痛みと快感の境目が曖昧になる。

「誰にも。俺だけか」

「ヴァルドだけ、だってば……っ♡」

「……もう一度」

「ヴァルド、だけ……♡」

胸に顔を埋めたまま、彼の体が微かに震えた。

乳首を甘噛みされながら手が腹を滑り降りていく。臍の下、下腹の産毛を指先でなぞられて、太腿の内側を撫でら

れて、もう自分がどれだけ濡れているか分かっていた。触れられる前から、とつくに。

指が秘裂に触れた。合わせ目をなぞるだけで蜜がとろり♡と指を濡らして、くちゅ♡♡と小さな水音が響く。

「もう、こんなに」

「……言わないで」

「ここがか」

包皮を押し上げて、陰核を露出させる指の動きはこの前と同じ。でも今回は力加減が違った。親指の腹で陰核を押し潰すように圧をかけて、ぐりぐり♡♡と円を描く。

「ひううつ♡きつ、い……っ」

「きついかな。でも締めてる。ここ」

陰核への圧を維持したまま、もう片方の手の指が膣口に

押し込まれた。一本。ずるり♡と根元まで入って中で曲げられる。前壁の膨らみを指の腹でこする動き。

「あっ、あああっ♡中と、同時はっ……♡♡」

「この前は指で泣いたな。今日は」

指が抜かれた。あ、と思う暇もなく、体を持ち上げられた。壁に背をつけたまま両太腿を彼の腕に抱えられる格好。足が地面から離れて、彼の腰の高さに秘所がさらされた。

何かが当たった。硬くて、熱い。指じゃない。

見下ろそうとしたけれど角度的に見えなかった。でも太腿の内側に押しつけられた感触で分かる。大きい。人間の男とは比べ物にならない。根元に向かって太くなっていく形状が内腿の肌越しに伝わってくる。

「っ……ヴァル、ド」

「怖い」

「怖く、ない。でも入る、の……？」

「入れる。ゆっくり」

先端が膣口に宛がわれた。熱い。鍛冶の火みたいな熱が入り口の粘膜を灼く。亀頭が押し込まれた瞬間